

どうとくのひろば

No. 30

単行本のご案内

知りたいことがきつとわかる! 道徳教育Q&A

河合 宣昌 著
定価 1,650円(税込)
B5判 184ページ



考え議論する 新しい道徳科 実践事例集

鈴木 明雄
江川 登 編著
定価 1,980円(税込)
B5判 240ページ



道徳に チャレンジ

石黒 真愁子 著
定価 1,980円(税込)
B5判 160ページ



小学校・中学校 納得と発見 のある道徳科

島 恒生 著
定価 1,980円(税込)
B5判 216ページ



どうとく 発問ラボ 島先生と考える!! 今年コラボ開催! どうとく発問ラボ × 道徳セミナー

●小学校/中学校
島 恒生 先生
畿央大学大学院教授



●小学校
黒田 弘子 先生
愛知県みよし市立中部小学校教諭



●中学校
多田 義男 先生
筑波大学附属中学校教諭



ご好評いただいている「どうとく発問ラボ」と「道徳セミナー」を、今年度は連動させて開催します。

「どうとく発問ラボ」は、ある教材の発問について、島先生と実践者の先生との対談形式で考える動画コンテンツです。今年度は、「どうとく発問ラボ」で検討した発問を使用して「道徳セミナー」で模擬授業を行います。よりよい発問づくり、授業づくりの参考にさせていただければ幸いです。

「どうとく発問ラボ」の視聴、「道徳セミナー」への参加申し込みはこちらのQRコードからどうぞ!



どうとく発問ラボ 日文 web サイトで動画公開

2021年10月中旬 小学校「すれちがい」
11月中旬 中学校「世界を動かした美」

発問ラボで検討した発問で模擬授業!

道徳セミナー オンラインで開催

2021年12月5日(日) 13:00~
小・中の模擬授業、授業講評、島先生講演

こころのひろば

自然と人が交わる場所で
[針江生水の郷委員会] 2

特別企画

よりよい社会のために
道徳教育ができること
[永林 基伸] 6

見てわかる! 道徳
「個性の伸長」(小学校)
「向上心、個性の伸長」(中学校)
「よりよい学校生活、
集団生活の充実」
[越智 貢, 上村 崇, 奥田 太郎] 8

実践事例【小学校】
多面的・多角的に考えを広げたり、
深めたりする道徳授業をめざして
[北沢 和也, 島 恒生] 10

こんなコト、聞いてみました!
道徳の授業について
悩んだ経験はありますか?
[熊丸 朱美, 松本 彩佳] 14

地球の仲間からのメッセージ
飛ぶ
[長瀬 健二郎] 15

どうとくのひろば No.30

日文教育資料[道徳]
令和3年(2021年)10月12日発行
編集・発行人 佐々木秀樹
発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。 デザイン:モスリンググラフィック

CD33571

日本文教出版 株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



未来をにう子どもたちへ
日本文教出版

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

こころのひろば

自然と人が交わる場所で



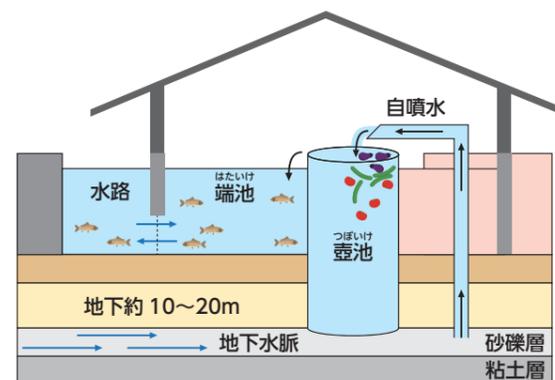
はり え しょう ず さと 針江生水の郷 委員会

Profile

滋賀県高島市新旭町針江の地元住民が中心となって立ち上げられた組織。湧き水豊富な針江地区にやってくる見学者へのガイドをはじめ、小中学校での講演会、自然を守る取り組みなど、水に関わるさまざまな活動を積極的に行っている。

※2021年9月現在、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ガイド活動は休止中。

【公式ホームページ】
<http://harie-syozu.jp/>



川端の構造図。きれいな水をためる「壺池」では野菜を冷やすことも。鍋釜などを洗う「端池」では魚が残飯類を食べてくれる。

ガイド活動を始めてから、自分たちの中に変化はありましたか？

今だから文化という言い方をしますが、それまでは普通の日常だったんです。家に水が湧いていることやそれを使うことは当然だと思っていましたし、若い頃には「こんな田舎なんて。」と思ったこともありました。けれど、美しい水に憧れて見学にいらっしゃるお客さんが喜んでくださると、「ここに生まれて、水を守ってきてよかった。」と感じますよ。私たちは川端の水を産湯に使い、川端には水神様が宿ると教えられて育ってききましたから、やはり水には特別な思いがあります。と言っても、自分たちにとってはいつもの生活を続けているだけですけどね。

ガイドの最後には必ず、「針江は、人と自然と生き物がつながっている場所です。」と伝えています。すべてが交わる場所、とね。ここの人たちは皆そういう気持ちで暮らしていると思いますから。そうすると、たくさんのお客さんが「いいところだった。」「来てよかった。」「ありがとう。」と言ってくださるんです。そういった言葉はとても励みになりますし、「こんな素晴らしい場所に住まわせてもらっているんだな。」と気づかせてくれます。この活動を通して出会った方には、本当にいろんなことを教えてもらって。楽しいですし、考えさせられることも多く、私たちにとっても大きな財産となっています。

お客さんとの交流の中で、心に残っているできごとはありますか？

毎年見学に来てくれている大阪府の小学校で、見学後に発表会をするというのでお邪魔したことがあるのですが、そこでは子どもたちが、「針江の人たちは水の本気で守っている『本気人』だ。」「僕たちの家族や

先生も、僕たちのことを本気で守ってくれている『本気人』なんだ。」「僕たちも自分の町を守っていけるよう、心がけるようになった。」「針江に行ってから、挨拶も今までよりちゃんとできるようになった。」などいろいろな思いを發表してくれました。ただ見学するだけではなく、子どもたちなりに何かを感じて持ち帰り、しっかりと実行に移していることに、深く心打たれましたね。私たちもそんな気持ちで案内していかなくてはと勉強になりましたし、とてもうれしくなりました。

子どもたちは素直ですね。東京からいらっしゃったご家族を案内したときは、小学4年生くらいのお子さんがよほど感動したのか「僕も帰ったら家に川端を作って魚を飼う。」と言って目を輝かせていました。また、別のお子さんに「おばちゃん、ここは臭くないね。」と言われたこともよく覚えています。最初は何のことかわからなかったのですが、どうやら産端の溝を流れる水が臭くないということに驚いたようなんです。そういう水は家から排出されるものなので、その子の町ではもっと汚くて臭いそうなんです。この水はきれいだと。住んでいるだけでは気づかないことだったので、印象に残っています。

いろんな地域の人たちと直接関わっているからこそ、学びや感動がたくさんあるんですね。

とは言っても、この町に住む人って何も気張っていないんですけどね。お客さんを迎えるようになったから特に水をきれいにしているのかということ別にそんなことはなく、これまで通りの日常が続いているだけ。水に感謝することも汚さないことも習慣として根づいていて、その仕組みこそが尊いものなんじゃないかなと思います。古くからの心を大切に守り続け、団結力がある針江の人々も宝ですね。



美しい水が流れる川端

まず、この町の水文化について教えてください。

針江地区の人々は、各家に清らかな地下水の湧き出る井戸を掘り、その水を飲料水や料理に使うなどして日常生活に取り入れてきました。このシステムを針江では「川端」と呼び、家の建て替えなどによって昔より数は減っていますが、現在も110～120軒ほどの家が敷地内に川端を所有しています。ここでは、水は上流の家から下流の家へ、そしていずれ大きな水路へとつながる共有財産です。下流の方々に迷惑をかけないよう、「とにかく水を汚さず感謝して使いなさい。」と子どもの頃から教えられ自然と身につけていくのは、針江ならではの水文化だと思います。

針江生水の郷委員会を発足されたきっかけは？

今から20年ほど前、町の記念誌発行にあたって写真家の今森光彦さんが針江の暮らしを撮影してくださり、NHKスペシャル「映像詩 里山 命めぐる水辺」としてテレビでも放送されたことがきっかけとなって、ここにたくさん見学者がいらっしゃるようになりました。これまで当たり前だと思っていたものが注目され、私たちも故郷の価値を再認識できてうれしく思いましたが、同時に私たち住民の生活も守らなければならないという気持ちになったんです。きちんとガイドの仕組みを作り、見学者とのトラブルも防いでいこうと。そうして、有志の住民26名により立ち上げられたのが当委員会です。現在は59名で活動しています。

でも、「ここは個人の敷地内だから入らないで。」と閉ざすのではなく、開いて紹介するというこのガイドの仕組みは、針江に来られた方々と育ててきたものです。そうやってお客さんに喜んでもらうことも一つのあり方なんだと考えることができたのは、皆さんとの交流があったからこそだと思います。

海外からお客さんがいらっしゃることもあったか。

はい。特に印象深いのは、2003年の「世界子ども水フォーラム」で、アフリカなど水問題を抱える国々から子どもたちが来てくれたことです。その子たちにとって水は命の次に大切なものなので、自噴して流れっぱなしになっている川端の水を見て、「もったいない。」と最初は驚いていました。しかし、「この枯れることのない湧き水は琵琶湖に流れて行って、魚たちの生きる場所を作る。最終的には京都府や大阪府や兵庫県に住む人たちの生活水となって、瀬戸内海や太平洋へと流れ込み、やがて世界へつながっていく。だから何ももったいないことはないんだよ。」と説明すると、とても納得してくれたんです。水は誰かとつながっているものだし、いずれは蒸発して雲になり、雨となって自分のもとへ帰ってくる。だからこそ私たちは水をなるべく汚さないように使っているのですが、彼らはそれを見て、「神の水」「カバタプライド」と表現してくれました。すごく素敵な言葉だなと、今でも心に残っています。

また、くみ取り便所からし尿を分けて畑の肥料に使うという昔ながらの方法も、肥料がなかなか買えない彼らにとっては貴重な学びだったらしく、マラウイ共和国（アフリカ大陸南東部に位置する国）のジョンくんという少年は帰国後にそのことを報告して、トイレ

のシステムを国に広げていったそうです。ちょうど3年ほど前、マラウイの代表者とジョンくんが滋賀県庁を訪ねてくれて、今マラウイではくみ取り便所がすごく増えていると言っていました。素晴らしい仕組みだと褒めていただきましたが、我々はそういった文化をもう捨ててしまっているの、何だか恥ずかしい気もしました。

ガイドと並行して取り組まれている、ヨシ原の保全活動について教えてください。

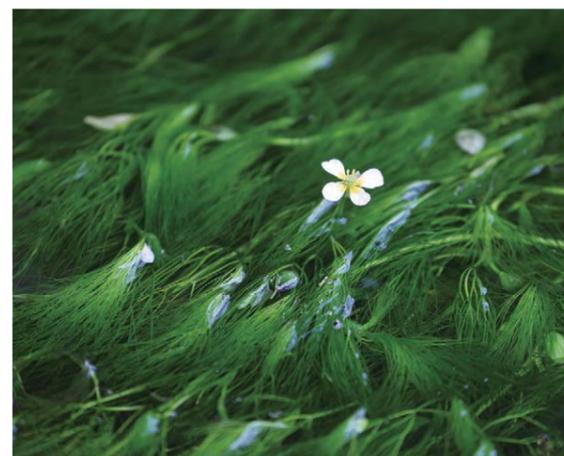
滋賀県の代表的なヨシ原の一つが針江の湖岸にあり、その保全活動として、市の環境課と共催でヨシ刈りをしたり、ヨシ原の火入れをしたりしています。参加者を増やしたいのでボランティアの方にも来ていただいて、お礼に地元産米のおにぎりや琵琶湖産のシジミ汁を提供したりね。

ヨシはヨシズやヨシ屋根の材料となるので、かつては生業として刈っている方もいました。ヨシ原では、残ったヨシのくずに火を入れることでできた灰が肥料となり、また新しい芽が出て、春の日差しにより温められた雪解け水の中でコイやフナの産卵が起こって……という自然の循環システムが構築されています。ヨシ原は生き物のゆりかごなんです。しかし、それも人が手を入れないとどんどん廃れていく。だから国から補助をいただきつつ、みんなで維持管理する取り組みをずっと続けています。

生態系保全のための活動なんですね。

そうです。ほかに、水田を使ったビオトープ作りというも行っています。滋賀県の人々とはとにかく琵琶湖を守るために、農業の使用回数を減らした農業にこだわってきました。そのかいもあって、ここの田んぼには驚くほど多種類の生き物がいるんです。そこで、休耕田に魚道を作り、魚が育ちやすいビオトープにするという取り組みを、当委員会の会員が始めました。すると、1年目から絶滅危惧種の生き物が何匹も見つかかり、「人間が少し手助けをしてやることで貴重な生き物も戻ってきてくれるんだ。」という気づきを与えてもらったんですね。これが大きな自信につながり、委員会全体でいろんな取り組みをしていこうという話になって、水田の草刈りや生き物調査をするようになりました。

この水田は、生き物を守るだけではなく。というのは、私たちは川の水を汚さないよう心がけていますが、田植え時に多すぎる水を減らす際など、どうしても泥水を川に流さなければいけないこともありま



透き通った川に揺れる梅花藻（6月撮影）

す。そこでその水を一旦水田に流し、泥を少しでも沈殿させてから川へ戻すという仕組みができています。泥は魚にとってよい産卵場所にもなるので、生き物のためにも水のためにもなっているというわけです。こうした取り組みは子どもたちにもどんどんお話ししながら、進めていきたいと思っています。

人が手を加えることによって守れるものもあるんですね。

はい。でも、それも私たちだけではわかりませんでした。自然といえば、長野県や北海道などに広がっているような、人の手が入っていない大自然のことばかりをイメージしていましたから。しかし実際、針江の田んぼのあぜ道には実にたくさんの種類の生き物がいる。豊かな自然というのは、実は人為的な営みが加わることによって保たれていくものもある。そうやって、針江という里山で当たり前のように営まれてきた命のつながりは、前述の今森さんが作品で解き明かして下さったから、私たちも気づくことができたんです。

今後の課題は、人の手が入るこのような仕組みをどう継続していくかという点ですね。ヨシ原保全にしても、ビオトープにしても、川掃除にしても、作業する人が高齢化すればするほど、続けていくのは難しくなりますから。だからこそ、地域の子もたちやいろんな人々と関わりながら取り組んでいきたいです。

これからの未来を担う小中学生や、本誌読者の先生方に向けて、メッセージをお願いします。

ここにはいろんな学校からお客さんがいらっしゃいますけれど、引率して下さる先生方は皆さん本当に熱心ですね。きれいな水に感動して、琵琶湖を守るための条例から研究される方もいらっしゃいました。先生ご自身がわざわざ勉強され、それを子どもたちに伝

えていってくださることは、とてもありがたく感じています。

子どもたちもすごく一生懸命に話を聞いてくれて、好奇心のスイッチが入ったことがありありと伝わってきます。小学生なんかは思ったことをストレートに質問してくれるので、「カレーがついた鍋を川端に入れておけばコイが食べてくれるんだよ。」と教えたら「コイはどんなカレーが好きなの？」なんて思いもよらないことを聞いてきたり。一生懸命だからこそいろんな質問が返ってくるんだと思いますし、丁寧にお礼の手紙をいただくことも多くて、いつも本当にうれしくなります。

昔は田舎を馬鹿にするような風潮もありましたが、今はだんだん田舎のよさが広く認識されるようになって、新型コロナウイルス感染症の影響で生活様式が変わってからは、自然に近い場所で仕事をするのも一つのスタイルになってきていたりしますよね。ここを訪れた子どもたちが「針江はきれいでいいところだった。田舎っていいな。」と思ってきて、それが原体験として刷り込まれていくことは、彼らにとっても私たちにとってもすごく意味のあることだと思うんです。自然を守ったり、いろんな手間をかけて野菜やお米を作ったり、食べ飲みすることのありがたさを実感したり、こういった里山では命に直接触れることができます。大変なストレス社会に生きざるを得なくなったとしても、ちょっと足を運べばそういう場所があるし、いろんな生き方がある。子どもたちがそれを知って、「何かに行き詰まってもここなら生きられるかもしれない。」と感じてくれたなら、またいつか来てくれればいいと思っています。

今日は本当にありがとうございました。

日本文教出版『中学道徳 あすを生きる3』には、針江の人々の生活を描いた教材「『川端』のある暮らし」を掲載しています。



特別 企画

よりよい社会のために 道徳教育ができること

ながばやし もとのぶ
永林 基伸

帝京科学大学教職センター特命教授（専門分野：道徳教育、教育経営学）

1977年より東京都の数々の中学校で教壇に立つ。葛飾区立中学校校長、葛飾区総合教育センター研修担当教諭、洗足学園音楽大学講師などを歴任し、現職。元全日本中学校道徳教育研究会会長。



日本の教科書では、よりよい社会の創造について考えていくことを大切にしています。その裏にはどんな思いがあるのか、『中学道徳 あすを生きる』編集委員の永林基伸先生にお話しいただきました。

中学生くらいの子供たちは、社会や将来に対しどんなイメージをもっているのでしょうか？

私自身は中学生のとき、将来について考えてもイメージが漠然としていて、社会参画がどういうことかなんてよくわかりませんでした。今の子どもたちを見てもそこはあまり変わっていないと感じますし、自分が社会の中でどう生きていくかということや中学生の段階ではそこまで真剣に考えない子が多いと思いますよ。よりよい社会のための目標である「SDGs」も、最近いろいろな場で目にするようになったので言葉自体は知っていると思いますが、やはりまだまだ日本の現状を把握できていなかったり、あまり関心がなかったり、子どもだけでなく大人もそういった人が多いと感じます。

社会の状況を知る手段として、現代の若者の多くはネットのニュースサイトやSNSを利用しますが、最近閲覧履歴から自分の関心のあるニュースが優先的に表示される機能も多いですね。アクセスを重ねれば重ねるほど、広く社会を見るという行為がどんどん妨げられる。グローバルといいながら、一方では関心が狭まってしまおうような方向に社会全体が進んでしまっているような気もしています。

世界を狭くしてしまっているのは自分自身なのかもしれないですね。

そうですね。だからこそ重要なのは、子どもたち

が見識を広げていこうとする、そのきっかけをどう作っていくかということでしょう。例えば、自国と他国の歴史や地理、文化、人々の暮らしなどについて知っているか、知ろうとしているかは、とても重要なことです。そういった知識がなければ、自分の生き方を考えても、結局自分中心のものに凝り固まってしまう。道徳の授業では確かに自分を深く見つめますが、それだけではなく、自分が社会の中で恩恵を受けて生きていることを自覚し、平和な社会のために自分はどうのように貢献していけるのかという、社会と自分との相互関係をしっかり考えていくことが必要です。そうでなければSDGsも机上の空論になってしまうし、今の教育はそういった知識面と自分との関わりが弱いと私は感じています。1時間の授業の中にいろいろな要素を盛り込むのは難しいという思いから、一般的には避けられていた面があるかもしれませんが、今はICT機器を使って資料を調べ、グループで意見交流させるなど、多様なアプローチができるのではと思いますね。

年間を通した授業プランとしては、まずどんなところから入っていくのがよいのでしょうか？

例えば、まずはクラスメイト一人ひとりの個性を知り、認め合うような授業をするのもよいと思います。「全員違った個性をもっているのは当たり前で、多少課題があってもそれをみんなで乗り越えていくというおもしろさもあるんだよ。」といった部分からスタートしたらどうかと。

私は今、教員志望の学生たちを大学で教えていますが、先日「道徳の授業開きではどんな内容を扱いたいですか？」というアンケートを取ってみたところ、約半数の学生が「学校のきまり」「生活リズム」などと

回答していて、がく然としました。道徳の授業は行動を規制したり何かの型に当てはめたりするためのものではないのに、新しい時代の学生たちにもまだそこが認識されていないのかと。ただ、中には「個性の伸長」「相互理解、寛容」などを取り上げた学生もいて、彼らは過去にいじめを経験していたり、学校での一番の心配事はいじめなのではと捉えていたりしたんです。私はどちらかというところ、互いをわかり合うような授業開きをめざしてほしいと思っています。

よりよい社会創造やSDGs達成のためには、まず隣にいる友達のことを知り、そこから自分自身に考えをつなげていくのが第一歩になるのですね。

まさにそうです。でなければ広がっていかないでしょう。そこで大切になるのが、子どもたちが自分の個性をのびのびと出せるような雰囲気を作ることですが、私は特に道徳の授業でそれを心がけてほしいと思っています。道徳に正解はありませんが、やはり授業で話し合いをさせようとすると「どうすればよいだろう。」というように行動を問いがちで、そうすると子どもは正解を言うしかなくなりますよね。そうではなく、話し合いを豊かにするには、迷いや自信のなさも含めた多様な考えを出し合う場面が必要になります。

ある学校で、「不当な労働により作られた商品」と「きちんとした労働条件下で作られたフェアトレード商品」があることを紹介し、最後に「不当な労働を減らすためにはどうしたらよいだろう。」と問いかけた授業がありました。すると、「フェアトレード商品を買う。」という結論に収束してしまったんですよね。問題は「不当な労働によって作られた商品がなぜ世界に横行しているのか」という点であり、その原因を探ることや、状況を改善するための活動をどう広めていくかというような新しい発想が子どもたちに求められていると思うんです。そうした思考の広がりによって、社会に対する自分なりの貢献の仕方を見通すことができ、意欲や自己有用感も高まっていくのではないのでしょうか。

子どもたちの主体的な思考力や創造力を育むためには、創造させる場面、「自分たちの力が社会の役に立つんだ。」と感じさせる場面を作りたいものです。言葉だけが独り歩きすることで「創造力がないと将来苦勞するぞ。」という変な強迫観念や圧迫感を与え、未来に夢をなくすようなことにはしたくないと思います。

確かに、自分の力が役立つという実感は自信につながりますよね。

はい。そういった意識は道徳の授業以外の時間とも連携させながら育めるもので、例えば帰りの会の時間に最近のニュースや話題を取り上げたりすることも大切かと思えます。そういったことを普段から積み重ねておくと、道徳の授業で「そういえばこの間フェアトレードの話聞いたよね。」などと深まることもあるでしょう。もちろん、各先生が専門とする教科の学習と結びつけてもよいですね。

また、職場体験学習などの経験もとても生きてくると思えます。私が見てきたいくつかの学校では、職場体験学習後にその取り組みの発表会を行っていました。それも、お世話になったお店や施設の人たちを招いて行うので、子どもたちの頑張りが地域にしっかりと伝わり、子どもたちも「自分のしたことが役に立ったんだ。」と達成感や責任感につながるようです。彼らは自分たちが体験したことを結構生き生きとしゃべってくれますから、それを道徳の教材と関連させたりすると、学びがぐっと深まります。コロナ禍が収束した折には、ぜひ取り組みたい活動ですね。

これから社会へと羽ばたいていく子どもたちには、どんなことを考えてほしいと思いますか？

中学生は、自分の将来設計というものをおぼろげながらも確立させなければならぬ時期だと思えます。だからどの子たちにも、まずは生きた知識を身につけて将来の選択肢を広げてほしいし、自分がこれから社会の中で前を向いて生きていくために何をしたいのか見つけてほしい。何のために働くのか、生きていくのか、それを考えることは学びのモチベーションになります。だからこそ道徳教育は子どもたちにとって重要で、その意識を学校全体や家庭、地域で共有しながら、未来をひらく子どもたちの力を育んでいきたいものだと思いますね。



道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。それらは密接に関わり合い、また競合する場合があります。ここでは、内容項目間の関係をわかりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

今回のテーマ

「個性の伸長」(小学校)
「向上心、個性の伸長」(中学校)
「よりよい学校生活、集団生活の充実」

監修：広島大学名誉教授 越智 貢
共著：福山平成大学教授 上村 崇
南山大学教授 奥田 太郎

個性とは？

他者と異なる優れた能力をもつ人は、通常「個性的である」と賞賛されます。しかし、その一方で、「個性的である」ことが他者との調和を乱す否定的な言葉として語られることもないではありません。いったい個性とはどのようなものなのでしょう。

この世界に一人しか人間が存在していなかったと想像してみましょう。その際、その人の個性は問題になるのでしょうか。どれほど奇抜な髪型をして体躯が優れていたとしても、この世界に一人しかいないのであれば、それを個性と呼ぶ意味はないでしょう。人間が複数存在し、集団で生活する中で初めて、私たちは互いにどこが違って何が共通しているのかを知ることができます。そのようにして、体格、力の強さ、足の速さ、手の器用さ、頭の回転の速さ、記憶力、社交性など、さまざまな点で他者と自己とを比較しつつ、私たちは自分の個性について考えることができるのです。だとすれば、差し当たり、個性の意味は集団あるいは他者によって与えられると、いいように思われます。

他者評価と自己評価

とはいえ、そうともいい切れない事情も頭をよぎります。例えば、ほかの人との共通性に注目して、その性質についてほかの人よりも優れたものを自分もっていることが自分の個性だと考える場合、あるいは、ほかの人との違いに着目して、周囲の人と違った発想や行動をすることが自分の個性だと考える場合はどうでしょうか。これらの「人よりも優れている」「人とは違う」という評価は、他者から自分がどう見られているか、という他者による評価だけからなされています。このように他者の評価だけに委ねた自己評価は、自分自身の個性といえるのでしょうか。

無論、他者の評価を無視して、自分の思い込みで独りよがりな評価をしても、個性の意味は失われることになるでしょう。個性が他者による評価だけでは成り立たず、そして、それを欠いた自分自身による評価だけでも成り立たないとすれば、個性を追求するためには、さらに検討すべき事柄があるに違いありません。

個性の伸長と向上心

ここで考慮すべきことは「個性の伸長」の視点でしょう。つまり、個性は固定したものではなく、発達段階とともに育まれるという事実です。

子どもたちは、発達の過程で、他者との比較による他者任せの評価から抜け出し、徐々に自分自身についての自己評価の基準を確立するようになります。それとともに芽生えるのが、めざすべき自分自身になるようとする向上心です。

向上心は集団とともに育まれます。集団生活の中で、私たちは、ほかの人たちから評価されるだけでなく、自分もほかの人たちを評価し始めます。そのとき私たちの中では、他者による自己の評価や自己による他者への評価、さらに自己自身による自己評価が交錯しています。このようにして、私たちはほかの人たちの評価を吟味しつつ、自分自身の評価基準を確立しようとしているのです。そして、それとともに際立ってくるのが、自分のめざす姿を追求しようとする向上心です。

個性の伸長と学校

この成長過程で、自分の理想像とともに、他者に対する評価基準が変化していくことも忘れてはなりません。例えば、先生に敬愛の気持ちが生じる当初の理由は、「先生は偉い人だから」というものだったかもしれません。しかし、子どもが成長して社会との関わりと理解が深まっていく中で、「先生は専門知識を豊富にもっている」「先生は正しさという視点で自分たちの成長を考えている」など、それまで気づかなかった理由も発見することになるでしょう。このように、他者に対する評価基準も自己評価の場合と同じく、自分自身を支えてくれる人々や社会との関わりが深まる中で徐々に育まれていくのです。

だからこそ、学校においては、個々人が集団の中で互いの個性に対して真摯に向き合い、互いを認め合いながら集団生活を充実させていく努力が欠かせません。その営みの中で、個性の伸長が促されることになるからです。

私たちは、個性の伸長が自己評価だけでは成り立たず、他者評価が支配する集団においても成り立たないこと、むしろ両評価の健全なバランスの中にこそあることを見落とすべきではないのです。



他者との比較や優劣ばかりを考えていると「個性」は他者や社会の評価基準で決まってしまう。集団生活の中で、他者の個性と自分の個性を考えていくことがとても大切。

図1 「個性」の基準って何だろう？

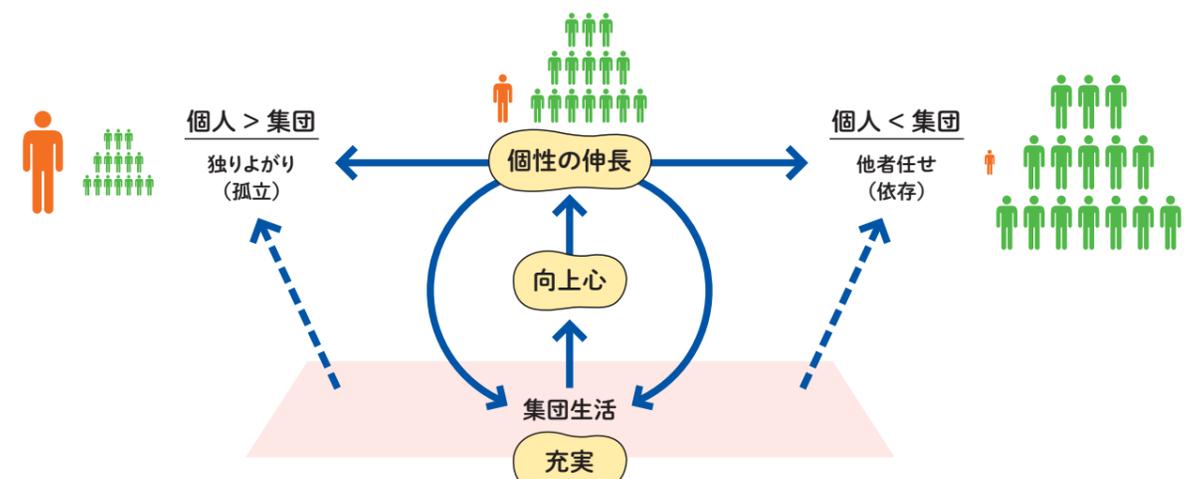


図2 個性の伸長と集団生活の充実の関係

多面的・多角的に考えを広げたり、 深めたりする道徳授業をめざして



滋賀大学教育学部附属小学校教諭 北沢 和也

教材名 二十五人でつないだ金メダル
(『小学道徳 生きる力 6』日本文教出版)

内容項目 C「よりよい学校生活、集団生活の充実」

主題名 集団の中の自分を見つめよう

ねらい さまざまな集団の中での自分の役割を自覚して
集団生活の充実に努めようとする態度を養う。

① ねらいとする価値と児童の実態について

本学習の内容項目は、C「よりよい学校生活、集団生活の充実」であり、高学年では「先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。」とある。

卒業が近づく6年生。そして、コロナ禍のためさまざまな活動が制限された子どもたち。リーダーなど目立つ役割は意欲的に取り組むことができるが、そうでない役割については消極的な態度になったり、受け身になったりしてしまうこともあった。制限される学校生活の中、なかなか前向きに学校生活を送ることが難しい子どもたちには、集団をよりよくしていくためには自分自身がどうあるべきかが大切であり、どんな立場や役割であっても、集団をよりよくしていくために自分が欠かせない重要な存在であることを理解してほしい。そして、一人ひとりが自分にできることを精一杯果たし力を合わせて、チームとして取り組んでこそ目標が達成できるということなどについて深く考え、今後の人生につなげていってほしいという願いを込めて、本学習を設定した。

② 教材の活用と工夫について

教材「二十五人でつないだ金メダル」は、1998年、長野オリンピックのスキージャンプ団体競技における悲願の金メダルを支えた25人のテストジャンパーの話である。主人公の西方仁也さんは、1994年のリレハンメルオリンピックで銀メダル獲得に大きく貢献した選手だったが、けがのために長野オリンピックの代表には選ばれず、テストジャンパーとしての参加を複

雑な思いで引き受けた。本当は出たかったであろう大会にそれほどの選手が裏方として参加するということは、簡単な決断ではない。しかし西方さんは、失敗すれば命さえも危ういという猛吹雪の中で25人の最後に飛び、見事テストジャンプを成功させた。こうして競技続行が決まり、日本に悲願の金メダルをもたらしたのである。

選手として戦っている原田雅彦さんの元チームメイトとして、元オリンピック選手として、安全な競技運営を支える25人のテストジャンパーの一人としてなど、さまざまな立場をもちながら、どのような思いで吹雪の中滑り出したのだろうか。そして、自分が獲得したわけではない長野オリンピックの金メダルが「ずっしりと重く西方さんの心に残っている」という言葉から、その重みの正体についてじっくり迫っていきたく考えた。

子どもたちに自分ごととしてじっくり考えさせるために大事にした手立ては、以下の2点である。

◇主人公への多面的な視点を生み出すための資料

リレハンメルオリンピックの様子や、猛吹雪の中テストジャンプを成功させたことなどを動画視聴によって押さえ、共通理解しておくことで、主人公の思いや葛藤に寄り添いやすくする。

◇仲間の考えに多面的に出会うためのカード活用

獲得していない金メダルが西方さんの心にずっしり残ったのはなぜかという問いに対して、自分の立場を選択し話し合う活動を取り入れることで、自分が集団の中で役割を果たしていくうえで何を大切にしたいのかということについて深く考えていけるようにする。



カードを用いて話し合う

板書例 (1時間目)

③ 主人公への多面的な視点をもつ

本学習では、主人公である西方さんのテストジャンプにかける思いに迫りたいと考えた。そうすることで、よりよい集団をめざすために自分はどうかあるべきかについて深く考えていけるだろうと仮定したのである。そして、西方さんの思いに迫るうえで、リレハンメルオリンピックでの活躍は欠かせないと考えた。

なお、授業構成は、教材を用いて考えていきたい問いを作る1時間目と、その問いについてグループで考えを深める2時間目の、2時間扱いとした。

まず1時間目。リレハンメルオリンピックのスキージャンプ団体競技の動画を視聴し、西方さんの大ジャンプで逆転金メダルに近づいたことや、エースの原田選手の失敗によって銀メダルになったことを知った子どもたち。ここで、世界2位となったことをうれしいと思っているのか悔しいと思っているのかを、マグネットカードを用いて選択させた。子どもたち全員が、真ん中よりも悔しかった思いを選択していた。

ここでさらに、次の長野オリンピックでは、同じ競技で金メダルを獲得したことを告げた。子どもたちからは「すごい。」の声。このオリンピックについて、西方さんは「リレハンメル銀メダルもうれしかったが、長野の金はずっしりと重く心に残っている。」と述べていることを伝えたあとに、表彰台に上がる日本の選手たちの写真を提示した。すると、何人かがある

異変に気づく。そこに、西方さんがいないのである。「どうして?」「あんなに活躍していたのに。」という反応を受け、実はけがによって、西方さんは選手に選ばれなかったことを伝えた。子どもたちからは、「え?」という反応とともに、「じゃあなんで、心に残っているの?」という声が上がった。

その後教材を範読し、テストジャンパーとは何かを確認したり、複雑な思いで競技を見守る西方さんの思いを考えたりした。「自分も出たかった。」「どうして、けがをしてしまったのか。選手として出ている原田さんが羨ましい。」など、西方さんの悔しい思いに寄り添う声が多かった。

金メダル獲得までの流れを子どもたちと確認したあと、次の時間にみんなと考えたいことを書く時間を設けた。最も多く書かれていたことは、「どうして選手じゃないのに長野オリンピックの金メダルが心に残っているのか。」であった。そのほかにも、「仲間の大切さ」「原田選手に対する西方さんの思い」などがあつた。教科書には書かれていないさまざまな事実を知ること、「仲間のために頑張りたい!」と簡単に言えない西方さんの複雑な思いに寄り添い、テストジャンパーとして参加した長野オリンピックがもつ意味合いに迫っていきたくという思いを膨らませることにつながったと考える。

畿央大学大学院教授 島 恒生 先生からの一言コメント

今求められている「考え、議論する道徳」は、「主体的・対話的で深い学び」のある授業です。このような授業では、子どもに課題意識があるかどうか、言い換えれば、子ども自身が頭の中に「問い」をもっているかがとても重要です。特に、考えたいことを子どもたちから出させる進め方は、子どもたちの間で拡散してしまったり、教師の想定とずれたりするなど、なかなか難しいものがあります。しかし、これが一致すれば、課題意識の非常に高い授業となります。

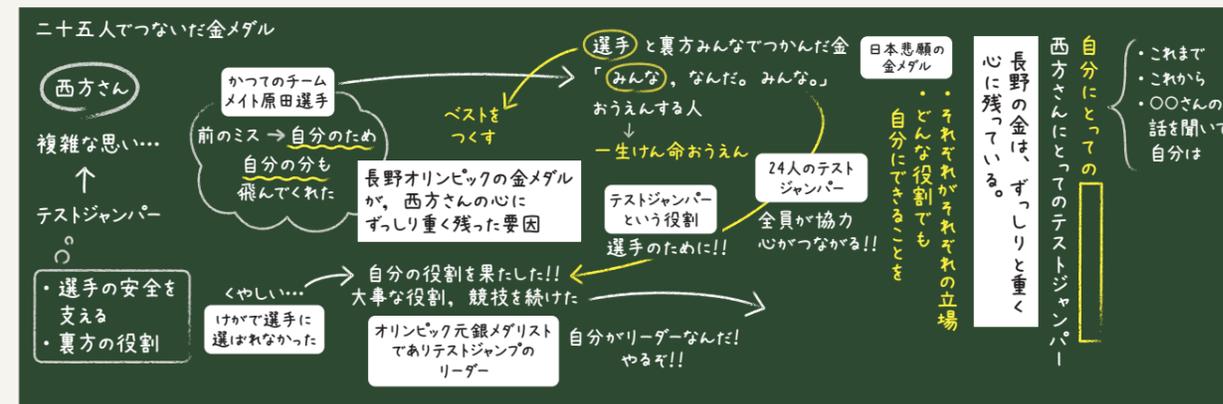
リレハンメルオリンピックでの悔しさや次の目標へのさらなる高まりから学んだ子どもたちの意識を、北沢先生は見事に次の課題へつないでいらっやいます。



展開例 (2時間目)

	学習活動 (・予想される児童の反応)	◇指導上の留意点
導入	<p>1 前時の振り返りをし、本時の課題を確認する。</p> <p>裏方だと思いながらテストジャンパーとして参加したオリンピックが、どうしてこんなにも心に残ったのか話し合っていきたい。</p>	<p>◇前時に子どもたちが書いた、次の時間に話し合いたいこととその理由を紹介することで、教材の内容や、本時の課題が明確になるようにする。</p> <p>◇西方さんのテストジャンパーに対する考え方が変容していることを押さえ、集団のために自分の役割を果たすという価値を意識できるようにする。</p>
展開	<p>2 「選手として参加していない長野オリンピックの金メダルが、なぜ西方さんの心にずっしり残ったのか。」をグループごとに話し合い、心に残った要因を多面的・多角的に考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 24人の思いを受け継いで、役割を全うできた。 ・ ついに、日本がスキージャンプで金メダルをとれた！自分は果たせなかったけれど、仲間が達成してくれてうれしい。 ・ 原田、自分のために飛んでくれてありがとう。 ・ オリンピック元銀メダリストとして、テストジャンプを成功できてうれしい。 ・ 自分はけがで選手ではなかったけれど、選手たちのためにできることをやるんだ。 <p>3 西方さんの心に残った要因やそれに対する思いを全体で交流させ、集団の中での自分の役割を果たすことについて考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団では、それぞれの立場でさまざまな思いをもっている人がいるんだな。自分にとって一番大切なものってなんだろう。 ・ もしかしら、金メダルでなくても仲間のために自分にできることを精一杯取り組んだから、心に残ったんじゃないかな。 	<p>◇西方さんを取り巻く周りのものや、西方さん自身のことをカードにし、金メダルが心に残った要因とそれに対する思いを話し合ったり選択したりする活動を取り入れることで、さまざまな価値や西方さんの思いを多面的・多角的に考えられるようにする。</p> <p>◇ねらいとする価値である「集団生活の充実」に深く関わるさまざまな価値と、教材内の言葉に関連づけたものにするすることで、価値を意識して話し合えるようにする。</p> <p>◇多面的・多角的な視点を整理しながら捉えられるように、子どもたちからの意見を類型化して板書する。</p> <p>◇「結果が金メダルではなかったら?」「この中で一番の要因は?」など、問い返しを適宜取り入れることで、自分の役割を仲間のために果たしたこと自体に価値があることや、集団の中で自分はどうかあるべきかについての納得解を、子どもたちそれぞれがもてるようにする。</p>
終末	<p>4 本時の学習を振り返ることで、集団の中での自分の役割を見つめ、これからの生き方の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまで自分は目立たない役割はいらないと思っていたし、やる気が出なかった。でも、どんな役割でも集団をよりよくするためには必要だと思った。 ・ 自分は学校の活動でリーダーではないから適当にしていたこともあるけれど、これからはリーダーを助ける6年生として5年生を引っ張っていかれたらと思う。 	<p>◇「これまで」「授業を通して」「これからは」など、振り返る視点を明示することで、教材の振り返りではなく、自分のこれからの生き方について考えられるようにする。</p>

板書例 (2時間目)



4 カードを用いて仲間の考えに多面的に出会いながら考える

2時間目。前時に子どもたちから出てきた問いを生かし、長野オリンピックではテストジャンパーとなった西方さんの心にその金メダルが残っている要因を、グループごとに探っていく。まず、前時に出てきた話し合いたいことの中から、「①オリンピック元銀メダリストでありテストジャンプのリーダー」「②テストジャンパーという役割」「③けがで選手に選ばれなかった」「④24人のテストジャンパー」「⑤かつてのチームメイト原田選手」「⑥日本悲願の金メダル」という6つをカードにして用意した。それらの中から、要因となるであろう4枚を各グループで選ぶ活動を取り入れ、仲間や役割、友情、責任などさまざまな価値と絡めながら、西方さんの思いを語る姿を期待した。

「⑤原田選手」を選んだ理由としては、「自分のときは銀メダルだったけれど、西方さんの思いも背負って飛んでくれたし、金メダルをとってくれたから。」という【仲間のため】に関わる意見。「③けがで選ばれなかった」を選択した理由としては、「選手ではないけれど、テストジャンパーという大事な役割が与えられたから。」「選手のために同じテストジャンパーの仲間と頑張れた。」など、【役割に対する責任】や【協力】に関する意見が出てきた。また、6枚のカード以外に、何も書かれていないカード（ほかに理由があれば

自由に書いてもよいカード)を活用するグループもあり、自分なりに書いた要因についてなぜそう思ったのかという理由を具体的に話す姿が見られた。「選手、テストジャンパー、観客というみんなでつかった金メダル」と書いた子どものグループでは、「選手、テストジャンパーだけでなく、観客にも役割があり、みんながそれぞれの立場で金メダル獲得に向かって役割を果たしたから。」という理由に納得する姿があった。

全体交流のあと、「自分の思う一番の理由は何?」と問うた。集団における自分のあり方として、その子自身が大切にしたいことへとつなげたかったからである。その際にも、自分で考えて理由を書いた子どもたちはそのカードを選んでいった。「選手並みの大ジャンプ」と書いていた子どもは、その理由として、「西方さんは選手でなくても、今の自分にできる力を他人のために、自分がとれなかった金メダルがとれるように出し切ったから。」と述べていた。まさに、【役割の自覚】【もてる力を出し切る】といった本時の価値につながる発言である。

振り返りでは、「自分も野球をしているけれど、審判やボール拾いなど裏方の人たち全員のおかげで野球をしているので、これからはいろいろな人に感謝しなければと思った。」など、今の自分の立場から周りの役割の大切さに気づいたり、自分が今の役割の中で大切にしたいことを見つめたりする内容があった。

畿央大学大学院教授 島 恒生 先生からの一言コメント

限られた時間の中で、多面的・多角的な考え方の話し合いができるよう、本時の課題解決のための6枚のカードを用意されたのは、よい工夫です。各グループで独自のものを考えてよいことにしたのも、とてもおもしろいですね。「対話的な学び」をいっそう促し、「深い学び」を実現するうえで効果的でした。子どもたちは、共通の目標に向けて一丸となることが大きな力を生み出すということと、そのような力が発揮されるのは、メンバー一人ひとりが、目立つ・目立たないに関係なく自分にできることを全力で行うという主体的な参加が必要であること、そしてそのことで得られる喜びを自覚できたことでしょう。





こんなコト、聞いてみました!

ちょっと聞いてみたいギモンに経験をもとにお答えいただきました。
授業のヒントになったり、励みになったり。
これからの道徳の授業に生かせる何かが見つかるかもしれません。

今回のテーマ

道徳の授業について悩んだ経験はありますか?



悩みながらも、
あきらめずに前へ

群馬県立図書館(前 群馬県藤岡市立藤岡第二小学校教諭)
熊丸 朱美

私が道徳の授業で特に感じてきた悩み2つと、その解決のために意識していたこととお話しします。

①「あれっ? 教材は違うけれど、前にもこれと似た発問をしたような……。考えが深まったのかな?」

道徳的価値に関する理解や考えは、道徳の時間を要として繰り返し考える中で深まっていくものです。だからこそ、発達段階に応じた指導をしていく必要があります。そこで私は、学習指導要領解説をよく読むことを意識しています。特に、道徳編「第3章 第2節 内容項目の指導の観点」には、内容項目の概要及び学年に応じた指導の要点が記載されていますので、それを踏まえたくて、目の前の子どもたちの実態に合わせた授業をしていくとよいと思います。学校で学年による発達の段階の系統表を作成・共有できればさらによいです。

②「あれっ? もう時間? 大事なことを子どもに考えさせている途中で授業が終わってしまった……。」

授業時間は限られていますから、適切な時間配分を考えないと、このようなことになってしまいます。そうならないために、教材把握をできるだけ簡潔かつ適切に行い、授業開始から15分以内には中心発問に入ることを意識しています。自分ごととして考える時間や、友達の考えを聞いてもう一度考える時間をきちんと確保することで、子どもたちは物事を多面的・多角的に考えたり、考えを深めたりすることができると思います。

子どもたちが自分ごととして深く考える道徳の授業をめざし、実践を積み重ねていくことが、子どもたちの成長につながると信じて、悩みながらもあきらめずに前へ進んでいくことが大切だと思っています。



「みんなで」

福岡県福岡市立姪浜中学校教諭 松本 彩佳

悩みしかありませんでした。「特別の教科」になるまでは、道徳の時間を別の授業に振り替えることも多くありました。2019年から特別の教科として全面实施されることになり、毎週教科書を使って授業をする、ということに不安を感じたのを覚えています。そんな自分が、前任校の福岡市立田隈中学校で道徳系の代表になったときは、正直、「どうして今、自分が……。」とまで思っていました。学校全体の道徳をどのようにしていくかの不安、評価の不安。どこから手を着けたらよいのかすらわからないスタートでした。

そんな中、立ち上げてもらった道徳推進委員会。戸惑っている私に、「話を聞いてみる?」と校長先生が引き合わせてくださったのが、福岡市立内浜中学校教頭・副島裕妃子先生でした。「授業作りや評価について学びたい、実際に授業を受けてみたい……!」という数多くの私の要望を、先生は叶えてくださいました。やがて、学校全体で道徳の授業に取り組むのは当たり前だという雰囲気を広げることができ、うれしいことに、授業前後の職員室では「こんなふう導入をしてみようと思う。」「こんな反応だった。」などと道徳に関する会話も増えました。何より、自分自身が「こんなにも道徳の授業っておもしろいんだ。」と感じたのです。

私の悩みの一つひとつは、周りの先生方に助けられて解決していきました。一人ではなく、係だけでなく、学校全体「みんなで」取り組めたからこそ、不安だった道徳が楽しくなったのです。悩みしかなかった道徳ですが、自分だけではできなかったことを、人との出会いや協力で形にすることができました。この経験と出会いに感謝しかありません。

地球の仲間からの メッセージ

獣医師, 元大阪市天王寺動物園長
長瀬 健二郎

飛ぶ

大空を悠然と滑空するワシ。自由を謳歌しているように見え、とても優雅に感じます。鳥のそんな姿に憧れをもった人は古今東西たくさんいたことでしょう。だからこそ、これまで多くの歌に自由の象徴として登場してきたのでしょう。でも、実は鳥たちは自由を謳歌するために空を飛んでいるわけでも、飛びたくて飛んでいるわけでもありません。彼らは飛ばざるを得なかったのです。さまざまな動物との生存競争の中、この地球上で生き残ってゆくために「飛ぶ」という行動様式を取り入れざるを得なかったのが、鳥という生き物なのです。

「空を飛ぶ」というのは大変なことです。まず、体が重いと飛べませんから、体重を軽くする必要があります。そこで、長い間食物が体内に滞留しないように腸を短くしました。骨の中を空洞化し(多くの梁が入っていて強度は維持しています)、咬むことをやめて体の中で最も重い歯をなくし、それによって顎を動かす筋肉も小さくできました。こうして体重をできる限り軽くしたのです。また、飛ぶためには当然、翼が必要ですので、前肢を翼に変えました。でも、前肢が



ヤンバルクイナ



キーウィ

ないと体のケアができません。そこで、首を長くし、くちばしが全身のどこへでも届くようにしました。そのほか、ここには書き尽くせないほどに体を改造し、ようやく飛べるようになりました。それもこれも、とにかく空を飛べるようになって生き残るためです。ですから、競争相手のいない世界、例えばニュージーランドのように哺乳類が渡ってくるができなかった場所では、飛べない鳥、いや飛ばない鳥が何種類もいます。天王寺動物園で飼育されているキーウィがその代表です。ガラパゴス諸島のガラパゴスコバネウモそうですし、沖縄本島のヤンバルクイナにも同じようなことがいえます。彼らは生存競争におけるライバルさえいなければ、飛ばなくても十分生活できたのです。

しかし、時代が変わり、世界各地にヒトという動物が進出するようになって、状況は一変しました。ヒトが気づかずに連れてきてしまったネズミ、あるいは意識して連れてきたイヌやネコもいます。わざわざ狩猟するために運んで放したキツネやウサギまでいます。これらの哺乳類がその地に入り込んだことにより、鳥たちは大迷惑を被っています。絶滅という取り返しのつかない状況になった鳥もいますし、絶滅寸前の鳥もたくさんいるのが現状です。ヒトが犯してしまった大きな過ちに気づいて、どうすれば状況を改善させることができるか大変な努力をしている人々がたくさんいらっしゃいますが、絶望的な状況にある、といわざるを得ないのがこの地球の現況です。